
最弱な魔法使い

トウクロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱な魔法使い

【コード】

N6199Y

【作者名】

トウクロウ

【あらすじ】

魔法使いの名門に生まれたにも関わらず魔法が使えない。そんな少女の物語

決別と出会い（前書き）

新連載です。

二つが連載ものなんて……いけるか？
大丈夫だ。問題ない。

決別と出会い

あれは、確か8歳になった次の日だったと思う。詳しい日は覚えていないが、深夜だったはずだ。

私は、姫島家当主の肩書を持つ父
姫島ひめじま 弦鶴げんかくに呼び出されていた。

父は日頃から険しい表情をしていたが、今はその顔に深い皺を刻ませ、さらに。

「どうだ。魔法は使えるようになったか」

外見に伴う威厳のある低い声で、父は私に言葉を投げてきた。

姫島家。

優秀な魔法使いを数多く輩出し、先の戦争では常に前線で戦果を挙げている。国を支える十二家の一角であり、名門中の名門だ。

「い、いえ。まだ初級魔法も使えていません……」

私は父の鋭い視線に挫けそうになりながらも、ただ結果だけを述べる。

そう、私は魔法を使えなかった。

名門の家に生まれて、この事実は笑い話にもならない。魔法使いの性能は遺伝的なもので、優秀な魔法使いの子供ならば優秀でなけ

ればならない。この家にとって私は異常だった。兄や姉、弟や妹も魔法は使えるし、双子の妹も魔法を軽々と使える。いずれも才能を開花させていた。

私はと言うと、魔法が使えないために家に閉じ込められていた。朝起きた時から魔法を扱うための勉強、訓練をして、それで一日が終わる。物心ついた時からその生活だったので、外の世界の事など書物で集めた知識しか知らない。

私の言葉を聞いていた父は、その表情を失望の色に変えていった。

「……そうか。なら、この家を出ていかなければならない」

「……はい」

8歳までに魔法を使えないようであれば家を出る。私が6歳の時、父から告げられた言葉だった。

一般家庭ならまだしも、名門に産まれてこの様だ。私の存在を世間が認知すれば、叩かれるのは目に見えている。そうなれば、姫島家の立場は危うくなるだろう。十二家は実力が伴う家を選ばれるので、その地位を狙っている者も少なくない。そういう者は十二家の落ち度を探そうと躍起になっている。

「お前は、昔から頭だけは良かったからな。理解してくれと思うていたぞ」

父の言つとおり理解はしていた。父は軽蔑の視線をこちらに向けしており、厄介払いをしたいことは。

「さあ、この家から出て行け。金は渡しておこう」

お札が入っているのだろう。封筒を懐から出した父は、私にも触れるのも汚らわしいように封筒を投げる。魔法を使っているのか、その封筒は私の足元に落ちた。それを手に取って深く頭を下げる。

「……今まで、お世話になりました」

別に、悲しいとか辛いなどの感情はなかった。この家には私の居場所はなかったのだから、逆に少しすっきりした気分だ。

父はすでに私に興味はないのか、早々と部屋を出て行った。

私はこの家を出ていくとしよう。

裏口から外に出て、当てもなく歩き続ける。持っているのはお金だけだ。姫島家と知られてはいけけないので、何かを持っていくのは禁止された。裏口から出たのも目立たないためだ。

雪が降っており、アスファルトの上に積もっていた。歩くたびにシャリと音が鳴り、靴の中を冷たくしていく。

高級住宅街を抜けて街に出た。人通りは少ないが、それでもこの時間では多いほうだろう。カップルと酔った大人をぽつぽつと見かける。比較的明るく、いくつかの店は営業中だとわかった。

そこで何か買えば良かったのだろう。しかし、どの店に入れば良いか分からなかったし、そもそもお金を使い方さえ知らなかった。

フラフラと体を動かしながら歩き続ける。すでに体力は限界だった。8歳が過ごすには気温が低すぎる。疲れと寒さにより思考判断は鈍り、自覚はなかったが家を追い出されたことにより、精神的にも疲弊をしていた。

自分がどこを歩いているのかも分からないし、足を動かしているのかも認識できない。焦点が合わず、目の前に何があるのかもわからない。

私は何もわからない。

微弱な衝撃と共に、肌を刺すような冷気を感じた。そうしてやっと視界が戻ってくる。どうやら私は倒れたらしい。

瞳に映ったのは少し汚れた雪だった。その雪が口に入ってくるが、それを吐き出す気力も残っていない。

もう、死ぬのかな。

漠然とそう思った。怖くはない。いや、恐怖を感じないほどに疲れていた。

急激な眠気が体を襲い、私は本能に従うように瞼を閉じようとする

る。

その時だった。

「ほう、日本でもこのような光景を目にするとは、この国も腐ったものだな」

凜とした声が鼓膜を震わした。声の主はどうやら私のすぐ傍にいらるみたいだが、生憎眼球が動いてくれない。だが、瞼は再びゆっくりと開いていく。

「ガキ、貴様は運が良い。この私に拾われるのだからな。感謝しろよ。ちなみ、私がこんな善意を出すのは機嫌が良い時だけだ。よく覚えておけ」

冷たくて鉛みたいに重かった体が、ふわりと浮いた。持ち上げたのだろう。お姫様抱っこされたと気付いたのは、もう少し後になつてからだ。

そして、“彼女”は私の顔を覗き込んできた。その顔は美しく、猫のように細い目が良く似合う。瞳は左右が違う色で、右が琥珀色、左が赤銅色だ。艶のある白銀の髪が私の顔にかかる。

「私の名前は黒沼格だ。くろぬめいたるガキ、貴様の名前を聞こう」

それが私　　姫島奏とかなで“彼女”との出会いだつた。

決別と出会い（後書き）

小説を一人でも多くの人に読んでもらえたら嬉しいです。
感想や誤字の指摘などもよろしくお願いします。

きつかけと結果（前書き）

文章がしょぼい……。

他のユーザーさんみたいに上手に書きたいです。

きっかけと結果

この世界に魔法の存在が確認されて、すでに100年以上が過ぎた。

きっかけは、世界各国で起こった現象からだ。ある日、世界中に黒いオーロラが同じタイミングで発生した。その漆黒にも勝る色は太陽や月の明かりを遮り、この青い惑星を闇に変えた。人々は「世界の終焉だ！」と叫んだ。まあ気持ちは分かる。しかし、オーロラは数分後には消滅し、世界は元の色彩を取り戻す。この事実は数時間で世界に伝わり、学者や宗教などの様々な人が自論を唱えていた。今考えると少し滑稽だ。

数日後、今度は原因不明の発熱が世界中に広がった。政府は黒いオーロラと発熱は関連性があるとして調査を始めるが、手がかりの尻尾も掴めない。とりあえず、患者を隔離する方法しか思いつかなかったようだ。感染する病気の可能性もあったからだろう。だが、その努力は実ることはなく、世界の9割の人が発熱の症状を訴えた。交通や生活ライン、流通などが停止し、このままでは大規模な死者が出る可能性が浮上する。

さらに数日経ったある日、意外な展開となった。今まで発熱で寝込んでいた者が、一気に回復に向かったのだ。不思議な能力に目覚めて……。

ある者は指先から火を出し、ある者は何もない空間から水を作り出した。個人差はあるが、発熱した者は何らかの能力に目覚めていたのだ。本人たち曰く、「何となく出来る気がした」と言う。魔法の始まりだ。世界中の人々がタネも仕掛けない超常現象を起こして

いたので、魔法の存在は爆発的に世間に広まる。しかし、新しい技術は悪用されるのが世の常。

魔法が認識されて数週間後、世界は戦火に包まれていた。魔法を軍事に取り込んだ国々が他国に侵略を開始。第3次世界大戦が勃発したのだ。各国も急いで魔法中心の部隊を構成、迎撃をするための態勢を整えた。

戦争と同時に、様々な国が魔法の研究を行う。いくら便利な力と言っても、その存在は不安定なものだ。原理は？発生条件は？

研究の過程で解明されたのは以下の通り。

- 1．魔法を使える者と使えない者がおり、発熱がきっかけで魔法が使えるようになるらしい。
- 2．魔法を使える者には魔力が宿り、魔力を媒体として魔法を使える。この魔力の容量には個人差がある。原則的に、魔力を多く消費すると魔法の威力は比例することが確認された。
- 3．魔力の最大容量は訓練しても増加することはない。が、減少することもない。
- 4．ファンタジーに良くある詠唱はない。しかし、魔法はイメージによって攻撃力、構成スピードが上がるので、各自イメージしやすい詠唱で魔法を使うことが望ましい。

など、大まかに言ってこんな具合だろう。早い話が才能によって大きく左右されると言うことだ。

20年続いた大戦は、アメリカを中心とした国連軍が勝利を収める。

日本国は国連軍に所属しており、最前線で活躍したのを評価された。その活躍を支えたのが十二家だ。日本国はその後の国際社会で有利な地位を築く。

「学校？」

長い黒髪を首の後ろで纏めた少女が、疑問符を浮かべながら振り向いた。

少女は左目に髪と同じ色の眼帯を付けており、右目の瞳も漆黒と言って良いほど染まっている。顔のパーツがバランスよく配置されており、美少女と言っても過言ではない。しかし、凛と上がった目尻が目付きを悪くしており、170センチの身長も相成って少し威圧感を感じる。一言で表すと「クールな美少女」だ。

その少女の視線の先には、木で作られた椅子に座っている絶世の美女がいた。

オッドアイの瞳が少女をじっと見つめる。プラチナブロンドの髪が窓から入ってきた朝日を反射し、まるで美女の周りを天使が踊っているようだ。色気がある顔の造詣は同性でも見とれてしまい、グラマーな体格は男達の視線を釘付けにするだろう。

黒沼格。

数年前の冬。死にかけた少女を拾い、以後ずっと面倒を見てきた女性だ。

格はそのふっくらと唇を妖艶に動かす。

「ああ。ちなみに、もう手続きはしておいてある」

女性に耐性のない男性ならば、その艶やかな声だけで腰が砕けてしまっただろう。ただし、口調は女性らしいとは言えないが。

「また事後報告……」

「そう言っな。私の性格は知っているだろう？」

げんなりとする少女　黒沼奏を見て、格はくつくつと妖しく笑った。

「……うん」

ため息混じりに頷いた奏は、テーブルの上に出上がった料理を乗せていく。

「おお、今日の朝食はスクランブルエッグか。グッジョブだ！！さすが私の“娘”だな」

「“母さん”が生活力ゼロの性格破綻者だからね」

「くっ、言っようになっただなあ」

「母さんの娘ですから」

取り留めのない話をしながら、奏は格の向かい側の椅子に座る。

「拾ったときは従順で可愛かったのにな」

「はいはい。さっ、食べるよ」

中々ひどい扱い方だったが、格はそれをなんとも思っていないのか、二人で「いただきまーす」と言っつて箸を手を取った。

「で、話の続き何だけど」

「ん？………ごくん。ああ、学校の件か。ちゃんと理由はある」

白ご飯を口に含んでいた格は、たっぷりと時間をかけて飲み込む。

「聞いて驚け！貴様の入学する学校は、何と世界最高峰の教師、生徒、設備がある“皇総合魔法学園”だ」

「……………は？」

ニタリと笑う母とは対照的に、娘はスクランブルエッグを食べようと口を開けた状態で固まった。

きつかけと結果（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！
もう感動しました。

感想・誤字などの指摘をお待ちしています。

母と娘（前書き）

三日連続更新です。

がんばった！

母と娘

「ちよっ、ちよっと待って！」

私は思わず立ち上がった。母さんは未だにドヤ顔で、未だにニヤニヤ笑っている。

……ちよっと殴りたい。

「す、皇総合魔法学園って、あの超エリート学園でしょ！私が入れるわけないじゃない。しかも理由をまだ言っていない！！！」

皇総合魔法学園。

日本のある離島に作られた、魔法使い育成を目的とした学園だ。島の半分は学園の敷地で、小学校、中学校、高等学校、大学、寮、研究施設などが建てられている。島の残りの敷地は、シヨツピングモールなどの娯楽施設が立ち並び、学生たちや観光客で賑わっているらしい。

学園には優秀な教師が揃っており、全て学長がスカウトしてきたという噂がある。教師陣は十二家出身の者や元魔法部隊に所属していた軍人、魔法研究施設に勤務していた科学者など様々な職種、人が勤めている。生徒の方は、かなり難しい試験を合格した者だけで、20人に1人程度しか受からない超のつくエリートだ。その合格率で運営が上手く行くのか？と疑問が出るが、毎年世界中から受験生が来るので問題はないだろう。

基本的には魔法を中心とした学園なのだが、普通の授業や部活も

やっております、特に運動部が盛んだった。学校行事なども豊富で、それ目当ての観光客も少なくない。

それでも、魔法使いの中でも超エリートが行く学園なのだ。私も初級魔法なら使えるようになったが、入学するには明らかに無謀だった。

「理由なら2つある。まず1つ目、これは依頼だ」

先程の不敵な笑いを消し、母さんは急に真剣な表情で話し始めた。仕事をしている時の顔だ。

そんな母さんの態度に私は落ち着きを取り戻し、再び椅子に腰掛ける。

「仕事なの？」

「ああ。最近、十二家の勢力図が変わりそうだな。十二家の連中は他の家を没落させようと必死だ。内輪で争って何とも滑稽だが、そうするとハイエナ共が群がってくるだろう？無能な奴らが虎視眈々と、十二家に入ろうと狙っているわけだ。そこで貴様には学園に入ってもらい、十二家連中の馬鹿息子と馬鹿娘を狙うハイエナ共から護衛してもらおう」

母さんは淡々と説明すると、何も無い空間からクリアファイルを取り出して私の目の前に置いた。私はパラリとファイルを開き、さっと目を通す。……って

「あの……護衛対象は何人でしょうか？」

「何で敬語なんだ。護衛対象は十二家出身の奴らで、学園に所属している奴ら全員だ。30人ほどだったか？」

はあ！？

「いやいや無理！ぜつつつつたいに無理！！いくらなんでも多すぎるって！そんなに体が別れるか！某忍者漫画みたいに影分身使えってか！それに教師も混じってんじゃん！大人だったら自分の身は自分で守りんしゃい！！」

「H A H A H A、キャラが崩壊してるぞ。ボブは相変わらず面白い反応をしてくれるな」

「笑うな！って言うかボブって誰！？」

中学校の英語の教科書に出てくる外国人か！

とりあえず、深呼吸深呼吸。

す〜は〜、す〜は〜……。

「ひっひっふう〜、ひっひっふう〜」

「はいそこ茶化さない」

「ちっ、もう冷静になったか」

つまらなそうな顔になった母さんは、パクリと白ご飯を口に含む。

「もぐもぐ……ごくんっ。護衛対象の詳細はそれに書いてあるから、

ああ、こんな時に素直に感謝出来ない心が憎らしい。

本当は、感謝だけでは足りないほどに救われているのに。

3日後。

「そろそろ時間だな」

母さんがポツリと言った。

空港内では多くの人が行き交い、様々な声が混じって鼓膜に不快感を与えてくる。

私はキャリーバックを手に持ち、プラスチックの椅子から立ち上がった。

「そうだね。もう行かないと」

今でも母さんの元を離れるのは少し寂しい。でも、これは母さんがくれたチャンスだ。私は任務をこなしつつ、学園生活を出来るだけ楽しむことに決めた。

「あんまり、しつこいのは私のキャラじゃないな。ここで見送るところでしょう」

隣に座っていた母さんも立ち上がり、私の体を少し強く抱きしめる。

「えっ？ちよ」

思わず顔が赤くなるのが分かった。こんなことは姫島家の頃も、黒沼として生きてきた今までも経験がなかったからだ。

「しっかりとやってこい」

耳元で、いつもの凜とした声で、それでも温かくなる声質でそう言ってくれた。

私も母さんの背中に腕を回し、きゅっと抱きしめる。

「うん。行ってきます」

周りの人にかなり注目されていたけど、心が温かくなったのでよしよしよじ。

母と娘（後書き）

感想・誤字などの指摘を待っています。

親バカと感謝　く黒沼格く（前書き）

今回は格さん視点で書いてみました。

親バカと感謝 ～黒沼格～

side 黒沼格

少しずつ遠ざかっていく飛行機を、私は管制塔の屋根の上で煙草を吸いながら眺めていた。吐いた白い煙が頼りなく中を舞い、蒼空と徐々に同化していく。

「やはり、少しは寂しいものだな」

私は思わず呟いた。

振り返ってみると、この8年間は今までの人生の中で楽しかった。一日一日が昨日とは違う面白みがあり、幸福感や充実感に包まれている。

まさか、ただの気まぐれで拾ったガキが、こんなにも心の中で大きくなるとは思っていなかった。

「まったく、私も親バカになったもんだ。あいつが1人で生活するのに、こんなに不安になるとは」

くっくっく、と私は声を出して笑う。少し、声が震えていたかもしれない。それほど心配と言っことだろう。

と、後方に気配を感じた。

「こんなところにいましたか。探しましたよ」

「“レム”か……」

私の数少ない理解者であり、仕事仲間でもある。奏のことも色々世話になった。振り向いてないので顔は分からないが、レムは微笑んでいるだろう。

「貴女のそんな顔を見る日が来るだなんて、お互い長生きしてみるものですね」

「ほつとけ」

私の照れ隠しが伝わったのか、レムはクスリと笑う。

「素直じゃありませんね、相変わらず。それに……本当はついて行きたかったんでしょ？」

いつものように、こちらの思考を見透かすような言葉を投げかけてくる。私は自嘲気味に口を歪ませた。

「まあ、な。でも、私がいたらアイツは気を使うだろうし、一度ぐらいは母親らしくしてみたいんだ。この仕事が終わったら、アイツはまた裏社会に身を投じることになるからな。あと、アイツはそこらにいる奴らより優秀だ。きっと誰にも好かれる」

「……本当に親バカですね」

「ああ。今更だろ？」

「そうですね。奏ちゃんが依頼に失敗して傷だらけで帰ってきたとき、貴女はすぐ様に仕返しに行きました」

レムは少し呆れが混じった声色でそう言った。そんな態度に少しムツとする。

「自分の娘」が可愛くない奴などいない」

「本気でまるくなりましたね。奏ちゃんに、今の貴女を見せてやりたいですよ」

レムはため息を吐きながら、何かごそごそとやっている。そして、私の目の前に一通の封筒が浮いてきた。

「奏ちゃんから預かったものです」

奏が？

少しの動揺が胸をかすめるが、それを押し殺して封筒を手取る。

中には、札束と手紙が入っていた。

「これは……」

まず、札束を手取る。間違いない。8年前、奏が家から追い出された時に持っていたものだ。ちよつと懐かしくて頬が緩んでしまう。次に手紙を手に取り、娘からの文章をゆつくりと読む

『母さんへ』

急に驚いたかな？直接渡すのはちょっと恥ずかしいから、レムさんに頼んだの。

正直にお礼出来なくてごめんね。学園にいけると聞いた時、本当に嬉しかったよ。ありがとうね。

ありがとうの言葉だけじゃ感謝の気持ちは足りないけど、依頼を達成して帰ってきたらもっと伝えるから。覚悟しといて。

一緒に入れたお金は、母さんが持つてて。勝手に使ったらダメだからね。私と母さんの出会った日の思い出の品なんだから。

じゃあ、心配は必要ないとは思うけど、体に気をつけてね。

追記：母さんとは血は繋がっていないけど、私にとっては本当の母さんだよ

あなたの娘より』

「親子揃って素直じゃないんですね」

私の涙を見たレムが、柔らかい声で言った。

私の娘を乗せた飛行機は、エンジン音すら聞こえなくなっていた。

親バカと感謝　〜黒沼格〜（後書き）

あれえ？こんなに良い人にするつもりなかったのに……。

感想・誤字の指摘など待っています。

こんな拙い文章を見てくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6199y/>

最弱な魔法使い

2011年11月21日20時54分発行